

本書は各々獨立した七つの論文から成り立つてゐる。しかしそれは單なる個々の論文の集積に盡きるのではない、互に密接な聯繫を保ちつゝ、著者の所謂「中世文化の一面を開明してゐるのである。その一面とは中世文化の宗教的・神祕的・藝術的なる一面に對する科學的・人間の・論理的なる半面に外ならない。著者の目的はかゝる中世文化の現實主義的傾向が三つの基本的要素、即ちゲルマニア的要素・ローマ的要素・アラビア的要素の各々が相結合融合する事によつて徐々に形成され來り十二、三世紀に至つて大なる成長をとげた事、斯様な傾向は全くルネサンス的なるものと考へられる可く、したがつてアルプス以北、特にフランスに於てはこの時代既にルネサンスの準備は全く整つてゐたのであつてそれが充分なる展開は必ずしも伊太利の影響に俟つ要のなかつた事を論證せんとするにあると思はれる。しかして著者はかゝる文化の基盤を中世末の經濟社會——都市生活の發展に求められるのである。先づ第一に中世の經濟はゲルマン民族の武力支配の經濟面であるとしてそれが前提たるゲルマンの政治組織の發展を説いた「中世に於ける主權の發達」なる第一章が設けられてゐる。次の第二章「中世に於ける經濟社會の發達」フランスに於ける中世都市の成立」「中世に於ける都市生活の表現形態」の三論文は中世文化の基盤としての都市の生活を解明せんとするものである。以上はどちらか云へば解説的なもので本書に於ては重點はむしろ次の最後の三篇に存する様に思はれる。「ゴテイクに於けるルネサンス的なるもの」「ゴテイクに於ける論理的なるもの」は共に都

市生活に基礎を置いた、中世文化の本質的表現たるゴテイク藝術の中にルネサンス的なるものが存在する事を明かにせられる。それは市民的な「人間より神への傾向」と名付けられる可き中世末期の新しい變化なのである。最後の論文「中世思想のルネサンス的傾向について」は本書の總論とも云ふ可く二百頁に近い長論文である。こゝに於てはフランス十二・三世紀に於ける古代復興の意味を詳論される。全般を通じて著者の立場がフランス的であり、餘りに論理的に過ぎ、新しいドイツ中世史研究の優れた成果の採用

が必ずしも充分でない點が遺憾であるが、それは研究の對象をフランスに求められたが故の止むを得ぬ事であらうか。七篇の研究は見事に結合され著者の目的は完全に達成されてゐるのである。中世の再認識は現代の要求する所である。その點でもこの著作は特に歓迎せらる可き理由を有する。たゞ著者の立場は近世史の見地であつてこの點必ずしも medievalist を満足せしめるものとは云へぬであらうが、だからと云つてこの書の意義が減ずる譯のものではあるまい。八百頁の大著をものされた著者に深き敬意を表する次第である。(開成館發行 A5版八〇〇頁 定價七圓) (會田雄次)。

フランス現代史

西海 太郎著

現代フランスの課題は恐らくドイツの指導下に、ヨーロッパ新

秩序建設に協力することによつて、如何にして戦敗の自國を再建するかにあるであらう。新らしきベタン支配下のフランスは、「祖國、家庭、勞働」をその政治原理として掲げてゐる。が果してこれによつて「自由、平等、博愛」の標語によつて代表される古きフランスを克服しうるであらうか。問題はフランス人の現代の世界史的把握にある。而もこの新らしきフランス、新らしきヨーロッパ建設の事業が——例へばその對獨提携の如きが——決して願調に進んでゐないことを思ふ時、單に國際情勢のみならず、フランス人自身が古き原理の克服、それよりの脱却が如何に困難であるか、換言すれば、フランス人が如何にこのフランス革命の精神、その展開に執着してゐるかを思はず居られない。現代フランスを理解するためには、第三共和政のみではなく、尠くともフランス革命にまで遡らねばならない。

こゝに紹介する西海氏の著述も亦フランス革命より筆を起し、ナポレオン時代、王政復古時代、七月王國時代、第二共和政及第二帝政時代、第三共和政時代の政治的展開を極めて詳細に跡づけられつゝ、一九四〇年の戦敗にまで論及してゐられる。まことに現代フランスの理解、特にその政治史的的理解には好適の書と云はねばならぬ。

而もこの書は所謂單なる政治的現象、政治制度、革命、戦争、外交等のみを取扱ふ古き政治史ではなく、政治的變遷と共に經濟的社會的變遷も亦巧みに敘述されてゐることをあげねばならぬ。更に又第一次大戦後の情勢、フランス特有の屢々起る政變等、我

國には餘り知られてゐない部分が要領よく叙述されてゐる點は、この書の特色と云へよう。

只少しく欲をいへば、十九世紀フランスの理解には、政治や經濟等と共に、不可缺なフランス文化、就中精神的、思想的諸文化については殆んど觸れられてゐないのが遺憾といはねばならぬ。現代フランスの理解は、やはりこのフランス文化を無視しては完全といへぬ。恐らく著者もこのことは熟知されつゝ、諸種の都合上省略されたかとも思ふが、少しでも觸れられてゐたならより一層輝きを増すものと考へる。

とまれ我國には類書少き時、本書の公刊は學界並に一般知識界に大いに益するものとなるであらう。(四海書房發行 定價四圓 列國現代史叢書) (前川)

フランス史學

前川貞次 郎著

明治初期以來我が史學界、中にも西洋史學界に於て、壓倒的に優勢であつたのは獨逸史學であつて、今更獨逸史學の影響の下に生れた史學理論や史學史、さては研究方法に於ける優れた、實に夥多しい業績を例證として數へ上げる迄もない事である。成程フランス史學は「嘗つて明治の初期、一時我國に盛んに紹介翻譯された」のは事實であり、亦殊にその研究に於ても、今はなき箕作元八、中村善太郎の兩教授が大先達として輝かしき足跡を學界に